第六号：第八十首～第百三首

おやさと研究所嘱託研究員
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

第六号 80 から 103 までをまとめたい。

「そもそもこの世界は、泥海のなかに月日（親神）がいただけであった。そこで月日の心に浮かんだのは、人間の世界を創めようということであった。しかし、何もないところから創めるというのは大変難しいことで、まずは道具を見出さねばならないと段取りをつけていった。そこでよく見澄ませば、泥海のなかに泥鰌も「うを」や「み」や他の道具も見えており、その者たちをそばへ引き寄せて相談しながら、人間を創める守護を教え始めていったのである。このように何もない世界からすべてを創めようと思って、月日が心を尽くしてきた人間である。にもかかわらず、この道中を知っている者は誰一人なく、月日はなんとも残念である（80 ～ 87）。

繰り返すが、月日がだんだんと心を尽くし切って守護してきた結実としての人間である。それを知らずに高山にいる者はみな勝手きままにしており、これが月日にとって一番残念である。どのように報いていくかも分からない。すなわち、この世界で山崩れや雷、地震、大風は月日のこのもどかしさの現れである。どのような大社や高山であっても油断するなよ。いつ月日が飛んで出るか分からない。世界中の人は皆我がこととして気を付けよ。我が子を思う月日には、決して水くさい遠慮の心はない。ただし、どのようなことでも、あらかじめ精いっぱいにことわっておいて、それから月日の働きを見せる。だから、どのような事も恨みに思うではない。すべて各々が我が身を省みよ。この話はこれまでにも幾度となく説いてきた。だから、しっかりと聞き分けてほしい（88 ～ 96）。

世界中のそれぞれの人の心次第であり、月日が一人ひとりの心を見分けている。月日が人間の誠意ある心を見定めて、その真心を受け取りしだいにすぐに守護として返す。今まではどんなことを言葉にしてもまた心で思っても、すべて人間の心ばかりであったが、これからは善いことをしても、悪いことをしても、そのまま直ぐに返す。その意味で、今までは人間の努力で何か悟るということもあったが、もうこれからはそのような仕方では救われない。この世界の真の親は、月日であり、すべてを守護している。そこには何も嘘はない。これからはすべて真実であると思って聞き分けよ（97 ～ 103）。」

「おふでさき」では度々「聞き分け（る）」という言葉が登場する。第六号のこの箇所では 96 と 103 に見られる。それは、辞書的にいえば「聞いてその意を理解する」「納得して従う」という意味であり、親神が人間に求められている態度である。それに対して、「見分ける」のは親神である。「おふでさき」では、「見ていよ」「見えてくる」といった言葉で人間も「見る」ことの主体として示されてはいるが、「識別する」「弁別する」という意味での「見分ける」主体は親神として記されている。そこで、神と人との関係においては“親神が見分けて、人が聞き分ける”というあり方が理にかなっているのであろう。

このようなあり方は何を教えているのか。たとえば、雷が落ちたとする。それを目の当たりにしたとき、我々は我々なりにその事態を見分けている。「大きな雷であった」「家の近くに落ちたらしい」などと感想を述べる。しかし、その事態を真に識別しているのは親神であり、その眼差しは我々には持ちえない。「おふでさき」では「見渡す」「見晴らす」という言葉も使われている。

次に、我々がすることは、その事象をただ視覚や聴覚で感覚するだけでなく、雷が落ちることの意味を知ることであろう。ところが、雷が落ちることの意味は無限に広がっている。たとえば、現代では科学的な説明が幅を利かせており、「雷様」などより「放電」といった語彙のほうが頻繁に使われている。したがって、我々はそうした数多の意味の中を「聞き分けて」いかなければならない。先人の話に「神の話と人間のする話とには区域がある、なれど神の話と人間の話とごっちゃにするから訳がわからん」（『静かなる炎の人 梅谷四郎兵衛』）とあるように、その意味を知るには、さまざまな話を仕分けていく作業が必要である。神の話といっても、人間が表現する神の話ではなく、神自身による神の話である。その話を聞かなければ「訳がわからん」事態に陥ってしまう。

さて、今回の「おふでさき」では「雷」だけでなく、「山崩れ」「地震」「大風」といった事象が取り上げられ、その意味するところを「しっかり聞き分けてほしい」と記されている。しかし、私たちの聞き分けがよくないからこそ「聞き分けよ」と詠われているわけで、その事象に込められている神の思いを解することは容易ではない。誰しも自分の許容量を超えた事柄を目の当たりにするとき、心身ともにフリーズしてしまう。恐怖、嫌悪、悲壮、落胆などに縛られて、ときに暗闇のなかに突き落とされる気持ちにもなる。人の心は実に難しい。

しかし、97 にあるように、その難しい人の心を「見分けている」のが親神である。同じ先人の話に「神の話、むつかしいことはない、多く万人の心見別（ママ）けるほどむつかしいことはない」とある。すなわち、神の話自体は難しいことではなく、一度聞き分けてみれば何とも簡単な話である。しかし、人間がそれを「聞いてみよう」と思えるまでには容易ならない道があり、人の心を見分けて育てることのほうがはるかに難しい。先に“親神が見分けて、人が聞き分ける”と主語と動詞だけを抜き出して記したが、それはつまり“親神が人の心を見分けて、人が神の話を聞き分ける”ということといえる。

それでは、今、自分はどういう気持ちであろうか。私の心は何をつぶやいているのであろうか。親神が見分けているのは、私の本音であり、偽りたくとも隠し切れないそのままの心である。と同時に、私の耳に届く話のなかで、どれが神の話であろうか。世の中に通用している格言や名言、学者が唱える明晰な理論、名曲のフレーズ、あるいは聖者たちが語り伝えてきた神の言葉なども私の心には響いている。しかし、その中で、自分の信じる道として、私はこの「おふでさき」を読んでいる。それが私の「聞き分ける」の第一歩である。

95 で「うらみ」という言葉があるが、子供に対して言うべきことを言うときの親の心情には、子供に恨まれる覚悟も含まれていると拝察される。親のほうも本音である。93 にあるように、遠慮や気兼ねのある間柄ではなく、本音と本音をぶつけ合う関係こそが、「見分け、聞き分け」の仲なのであろう。